

平家正節の教習順序にみる難易度について

鈴木 まどか

「平家正節」とは平家物語すべてに曲節と節博士（象）がついた譜本である。平曲を学ぶ者にとっては規範譜であり、教習順に編纂された教則本でもある。安永五（一七七六）年に尾張で荻野検校を中心に編纂されたが、これは長い伝承を経て訛謬を生じたため、語りの「標準語」を決めたとと言える。この訛謬とは方言の訛りではなく、師匠から受け継いだ癖と考えている。

江戸では当時「平家吟譜」が流行していたため、積極的な採用は麻岡検校が京都で「平家正節」を学んだ天保三（一八三二）年以降とみられる。麻岡検校に出資した島津斉興の存在も見逃せない。

現在の平曲伝承においては、「平家正節」百九十九句に「八坂流訪月」を加えて二百句と数える。教習順序はおそらく、まず「伝授物」三十八句を定め、残り百六十一句の「平物」を、難易度の低いものから大まかに並べて決めたのであろう。本日は教習が進むにつれて難易度が上がることを確認したい。

【入門】

江戸時代の記録に基づくと、平曲初心者にはまず平家正節一之上「紅葉」の中音「上日」と七之上「我身栄華」の中音「桜」を習う。

江戸の晴眼者の伝承では次に灌頂巻「小原御幸」を習う。中音の「二の声」や「中ユリ」には決まった琵琶の手があり、多くの句では語りながら琵琶を弾く。しかし灌頂巻では語り終えてから琵琶を弾き基本の音に戻るため、初心者は語りの旋律を正確に覚えらる。

一方、当道座の伝承では「小原御幸」ではなく十四之上「小朝拜」を学んだという。

次に「平家正節」の順に稽古が始まる。一之上の「鱸」は主な曲節を網羅し、清盛の昇進に伴い多くの役職名が並び、祝儀の句でもあるので、一句めに学ぶのに相応しい。一之上下の十二句は旋律も語りやすく、内容もわかりやすい。主たる登場人物のうち命を落とすのは土佐坊くらいなので、教習者は基本の旋律を覚えることに集中できる。

【琵琶伝】

「鱸」から数えて十五句が終わると、琵琶を習うことが許され「琵琶伝」の免状をもらう。琵琶の手は曲節ごとに決まっており、その曲節で用いる音階と関連している。十六句めに主な曲節を網羅する「鶴」を習うことで、旋律と構造の理解や内容と旋律の理解が深まる。

三之上くらいから例外的な旋律が目立つようになる。節博士には、五線譜にすると変容自在なものがあるので、教習を通して、前後の節博士との関係や口伝を学ぶことになる。

【五十句済、百句済】

五十句が終わると、本来「読物」として百七十八句めに習う「康頼祝詞」を稽古する。また百句が終わると、本来「五句物」として百七十一句めに習う「都遷」を学ぶ。

五十句済の免状が授与されると、当道座では披露目の会を催したようである。幕末の平曲会では「康頼祝詞」が何度も語られており、その幾人かは別の平曲会の記録から考えて五十句済である可能性が高い。

幕末に好んで語られた平曲はのべ五十句ほどで、百句以前に習得する句が多い。百句以降の句は人前で語る機会が少なかったためか「口説」「素声」が中心で、旋律も洗練されず単調である。成立期の平曲の姿を残しているのかもしれない。

十一之上から伝授物までの四十一句は「六代乞請」「妓王」「法住寺合戦」などを含み、「長物」とも称する。口伝に、「上二節モナキ様ナレトモ下二節コモリアタリ勝ニシテ耳ニ立ヌカ上手ナリ」、つまり節がないかのような語りが上手、とある。長物は、これを模索する段階である。

【伝授物】

伝授物の多くが、皇室や宗教に関わる内容の句である。

「揃物」では勢揃いした武士や朝敵を羅列する。「五句物」では城南宮や遷都の例を語る。「炎上物」は、市井の人々や仏像が焼き亡ぼされていく場面があり、精神的に辛い。

「読物」は、祝詞や書簡を読み上げるものだが、独特で複雑な節回しは初心に戻らないと覚えられない。通常、譜本に書き込まれる朱は、琵琶の手か他の譜本との比較を示す覚書だが、読物においては複雑な旋律の強調である。忠実に語ろうとすると重く長くなりがちだが、流鶯舎雑書には「セハシキハ悪シ、ソソリタルモノナリ」、つまり余裕を持つて心がそそるように軽やかに語るといふ口伝がある。複雑な旋律を軽やかに語るのは難しい。

「灌頂卷」は、建礼門院徳子の話であり、香を焚いて正装で習う。人前で語るときは一句のみとし、貴人からもう一句と所望されたら五句物の「城南離宮」を語る。灌頂卷・小秘事・大秘事は、内容も旋律も他の句とは別格で、精神的にやや精進潔斎が必要と感じる。

「八坂流訪月」や、通常は語らない挿入話「問の物」、口説を指声など別の曲節に置き換える「換節」も伝授物の扱いで、灌頂卷の後に修める。

【その他の特徴】

天保年間に京都で平家正節を修めた麻岡検校は、江戸では娘に正節を確認させながら、一か月かけて全句を稽古したという。「一部平家」も約一か月間の興行であったから、全句を語ると九十〜百二十時間程度なのであろう。

検校たちは習ったとおりに語るが、晴眼者は譜を見ながら聴き手の反応を受け止め、口伝や緩急を考えて語る。譜本

には時代が下るにつれて書き込みが増える。「那須与一」「木曾最期」などは人気句だったとみえ、練り上げられた印象が強い。幕末の江戸では「連平家」も好まれ、平家正節を平家物語順に再編纂した「鳴海家本平曲吟譜新集」には「導・脇・連」の書き込みが頻繁に見受けられる。

平曲の語り手は、平家物語を演じるわけではない。平家物語の詞（ことば）をはっきりと発音することで、内容の解釈を聴き手に委ねる。この発音にも特徴がある。例えば入道を「にうどう」、中宮を「ちうぐう」と割音で語る。促音便の「っ」は「ts」、ツメと表記があれば「tt」、ノムと表記があれば「tn」のような音で語る。じ・ぢ・ず・づも使い分ける。御母は「おんばわ」と振り仮名があるが、O-I-N-I-P-H-A-I-W-H-Aと考えると語りやすい。

平家正節の行間や口伝には、中世の要素が生きている。荻野検校の業績を称え、口伝を次代につなげたい。

（前田流平家詞曲相伝・平曲研究所代表）